

—2022年度 卒業式より—

魂譲り（譲り手）

今日、私たちは活水女子大学での学びを終え、それぞれに与えられた新たな道を歩もうとしています。これまでの学生生活を振り返ると、様々な出会いや経験で多くのことを学びました。そこには喜びや楽しさだけでなく、思い悩むことや苦しいこともありました。そんなときも家族や友人、先生方、多くの人に支えられ、今日という喜びの日を迎えることができました。

活水学院は今から144年前、愛と奉仕を建学の精神として掲げ、「この学院に連なる全ての者が、いつまでも渴くことのない活ける水を豊かに汲み取り、永遠の命を得るように」との祈りを込め、エリザベス・ラッセル先生が創立されました。この手桶には、その思いが満ち溢れており、ここに結ばれてきたリボンの一本一本には、先輩方の祈りが込められ、活水の伝統として今もなお受け継がれております。

今回私は、卒業生を代表して、「白」と「赤」のリボンを新たに結び加え、在学生の皆様にお譲り致します。白のリボンには、「月の光のように皆の進むべき道を照らしてほしい」との願いを、「赤」のリボンには「どんな時も太陽のように明るく、自分に誇りを持ってほしい」との願いを込め、お譲り致します。

在学生の皆様、どうかこの2本のリボンに込められた思いを心に留め、「活ける水を汲み取るもの」となってください。皆様の歩みの支えとなるよう、「新約聖書ローマの信徒への手紙5章3-4節の御言葉、「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということ。」をお贈り致します。

最後に、活水学院の上に、神様の豊かな祝福とお恵みがこれからも限りなくありますよう、心よりお祈り申し上げます。

荒木 乙羽（国際文化学部 日本文化学科 卒業生）

魂譲り（受け手）

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。

ただいま、これまで多くの先輩方より受け継がれてまいりましたこの手桶をお譲り頂きました。今年新たに、「月の光のように皆の進むべき道を照らしてほしい」との願いを白色のリボンに、「どんな時も太陽のように明るく、自分に誇りを持ってほしい」との願いを「赤」色のリボンに託し、結び加えて頂きました。わたくしたち在校生は、この2本のリボンに込められた思いを心に刻み、「永遠に渴くことのない、活ける水」をくみ続ける活水の学生として、歩んでまいりたいと思います。

卒業生の皆様は、この学び舎で、神様からの限りない愛を受け、先生方やご家族の祈りに支えられ、励まし合いながら歩んできた友人と共に様々な体験や学びを通して大きく成長され、今日、晴れの日を迎えられました。これからは、それぞれの道を歩んでいかれますが、喜びや感謝の時ばかりではなく、忍耐が試される時や、困難を覚え全てを投げ出したいこともきっとあると思います。しかしどのような時にも、神様はいつも共にいて先輩方の行く手を照らし、導いてくださいます。どうか愛と希望をもってこれからの道を歩み続けてください。

最後に、今日から始まる新たな歩みの上に、神様の豊かなお恵みと祝福がありますよう、心よりお祈り申し上げます。

真砂 光星（国際文化学部日本文化学科2年）

一朝の礼拝から 1—

「何事にも時がある」

コヘレトの言葉 3章 1～15 節

先日、友人と会った際、こんなことを言われました。「あなた、いつもタイミングがいいよね」。これまで考えたことはありませんでしたが、思い返してみると、一番思い当たるのは、日本語教師をはじめた時期でした。

私は、卒業後すぐに日本語教師をはじめたわけではなく、会社員として働いていた時期がありました。その頃、日本国内の日本語学校では、教授経験3年以上という応募要件があり、教授経験を積むには、海外へ行くことが必要でしたが、家族の意向もあり、それがかなわなかったためでした。そのため、会社員をしながら、国際交流のサークルやボランティア活動に参加していました。その後、しばらく会社員として働いていましたが、日本語教師を諦められずにいました。そんな時、海外の日本語学校で働いている先輩から声をかけていただき、家族の理解を得ることができたことから、海外で日本語教師としての仕事をはじめることになりました。

日本語教師をはじめた当初は、遠回りしてしまっただけで焦る気持ちもありました。しかし、今思い返してみると、会社員の経験は決して無駄ではありませんでした。例えば、企業での日本語研修を担当した際には、経験をふまえて研修参加者の質問に答えることができました。また、学校全体の業務を俯瞰して見たり、自分がやるべきことを考えたり、行動することができたのも会社員の経験があったからだと思います。

皆様の中には、今、苦しい状況の中で、「なぜ」という気持ちで心がいっぱいの方がいるかもしれません。しかし、神様は最も良いときをご存知で、そのときに必要なもの、道を備えてくださいます。このことに感謝し、日々の生活を送っていきたいと思います。

日本文化学科 富永祐子

一朝の礼拝から 2—

「真の休息とは」

マルコによる福音書 6章 30～33 節

GW が終わり仕事や学校が再開しました。しっかり休むことが出来たか。私は正直、休むことができませんでした。4年生になり進路や卒業論文について考えなければならないことが多くあり、課題に追われ、毎日アルバイトをするGWでした。

先ほどお読みした箇所はイエスによって宣教の旅に出発した弟子たちが帰って来たところから始まっています。ここでその弟子たちの報告を聞いたイエスは彼らにしばらく休息を取るようにと促しています。弟子たちのこの旅はイエスの指示により厳しい条件の下で宣教活動をするのでした。決して簡単なものではなく、弟子たちにとって相当の緊張を強いられたものであったと思います。人間は緊張がほぐれた時にどっと疲れが襲うことがよくあります。イエスはそのような弟子たちの状態を察してこのように言われたのかもしれませんが。この箇所を読み、本当の休みとは何かを考える機会となりました。イエスは弟子たちに「人里離れた所」で休息するように言っています。

私たちは心身の疲れを癒すために休息を必要としています。人それぞれ、ストレスの発散方法や休日の過ごし方は違いますが、私にとっては日曜日に教会に行くことが休息の1つになっています。私は去年1年間韓国に留学していました。留学中も毎週日曜日に教会に通っていました。その教会には青年部があり、大学生が中心になり礼拝とは別に様々な活動が行われていました。自分たちで料理をしてお年寄りの方々へ振舞ったり、讃美歌をアレンジして披露したり、説教の内容についてディベートをしたり、近くのカフェや映画館や運動場へみんなで行ったりしました。私は毎週日曜日に教会に通うことが楽しみでした。留学前の私はただ教会に行き礼拝を聞くだけで、教会にいる時でさえも心身は緊張状態にあり、本当の意味で休息することが出来ていなかったのだと思います。イエスは聖書の中でこのように語っています。マタイ 11:28 「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」これは私たちを招くイエスの言葉です。

教会は疲れを癒したい時、休息が必要だと思った時にいつでも行っていい場所です。コロナが収束していき、生活で縛られていた緊張感がほぐれてどっと疲れが襲う時があると思います。そんな時、皆さんも休息することが出来るひとつの場所として教会を選んでみるのもいいと思います。

英語学科4年 佐々木 美優

一朝の礼拝から 1—

「バトンをつなぐ」

ローマの信徒への手紙 12章6～8節

2004年6月4日、当時93才で聖路加国際病院理事長であった日野原重明先生の講演会が開催されました。学内外のお客様約800名が会し、軽快でいて心にしみるご講演にチャペル全体が一体となりました。先生はお医者様でしたが、哲学者であり、音楽家であり、何より「力強く愛を実践される方だ」と感じたことを思い出します。その時の感動とテーマの一つであった“ペイフォアード”のお話しはその後ずっと私の中で生き続けています。“ペイフォアード”とは受けたご恩をその相手に返すのではなく違う形にして次の人に渡すことであって、思いやりのバトンをつないでいく行為です。

さて、私は日々「活水の人たちは優しいなあ」と誇らしく思っています。荷物を運んでいると必ず誰かが「大丈夫ですか？」とドアを開けてくれます。どんな時でも変わらず優しく話しかけてくれる人…、授業の後に消しゴムくずをきれいに集めて席を立つ人…、学生の皆さんや教職員仲間の自然で美しい行為に心があたたかくなります。そのような時、私の前に思いやりというバトンが差し出されているのだらうと思うのです。

神様は私たち一人ひとりに「良い持ち味とそれを活かす使命」を備えてくださっています。優しさや誠実さ、人を和ませる朗らかさや力強い行動力…、など神様から賜った自分ならではの持ち味を活かす時、きっと他人の心に灯をともしることができて、かつ自分の心もあたたかくなることでしょう。思いやりというバトンが差し出されたら素直に受け取って、さあ発信の準備ですね。自分ならではの良い持ち味を最大限に活かして、次の誰かにバトンをつなぐことができますように…。

橋本 祐子 (就職課)

一朝の礼拝から 2—

「神様のご計画のうちに」

エレミヤ書 29章11節

私は“神様のご計画”という言葉を知ると、思い出すエピソードがあります。それは小学生の頃、良いことが起こった際「ラッキー！」と言った時のことです。この言葉を聞いた両親は、「その言葉も良いけど、神様があなたに与えてくださったご計画の一つかもしれないから、神様ありがとうございますって思えたらいいね」と教えてくれました。この話を聞いた私は、「人生で起こることは神様のご計画なんだ」と思いました。この考えは、年を重ねるごとに心強い味方になっていったように感じます。

例えば自分にとってすごく心細く、不安になる出来事があったとしても、「これは神様の計画かもしれない。この経験から学ばせようとしているのかもしれない」と思えるからです。失敗を経験した時は、もう二度と立ち直れないと思うような出来事が起きても、時間が経てばそれも思い出であり、それらの失敗を踏み台として学べたことが数多くあります。「こんなピンチなことがあってね」と母に話をすると、「そんなことできないと思うことができるのが神様なのよ」といいます。昔の私なら「私の力でできた」と思ってしまう事もあったかもしれませんが、今は、そう思うことはありません。神様の祝福があるからこそ、今の生活を送ることができているのだとおもいます。

私は礼拝などでお話をする時、その時の自分に必要だと感じる聖書箇所に沿って内容を考えます。今回この箇所を引用したかと言いますと、「進路」で悩んでいるからです。たくさんの方に助言をいただきながら悶々とした日々を過ごしていますが、この箇所を読むと自分の選択に自信を持つことができます。

計画というものの線引きは、私にはわかりません。もしかすると、計画なんてないのかもしれない。これは、私がいくら考えても解決することはできないでしょう。しかし、二度と立ち直ることができない絶望の中にも、神様が私たちを見捨てるということは決してないと思います。だからこそ、これからも神様のご計画を信じて毎日を大切に過ごしていきたいと思います。

今田 涼加 (音楽学科)

一朝の礼拝から 1—

クリスチャンが家族を亡くすということ

コヘレトの言葉 3 章 1~2 節

今年も残り少なくなってきました。皆様にとって、2023 年はどんな年であったでしょうか。私には大きな出来事が 2 つありました。1 つ目は膝の手術を受けて、40 日間入院したことです。退院後も杖での生活を余儀なくされ、ようやく最近、杖なしでも歩けるようになりました。2 つ目は、私の入院中に父親が亡くなったことです。実家では私一人がクリスチャンでした。「私はキリスト教信者としての道を歩んでゆく。」今まではそれでうまくいっていました。しかし、ノンクリスチャンの親を亡くした時、その死をどのように受け止めて良いのかよいのか葛藤してしまいました。

例えばヨハネによる福音書 3 章 18 節には「御子を信じるものは裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである」と書かれています。このような御言葉はノンクリスチャンの家族を失った者の心に鋭く突き刺さります。一方で、救済が普遍的であると説く牧師や神学者もいます。すべての人がイエス・キリストの贖罪によって、救われているという教えです。例えば、第一テモテの手紙 4 章 10 節には以下のような聖句があります。「わたしたちが労苦し、奮闘するのは、すべての人、特に信じる人々の救い主である生ける神に希望を置いているからです。」これを読む限りでは、信じていない人が救いの対象から外されているわけではないというふう解釈できます。全ての人々が救いの対象になるという考え方を、普遍主義と呼んでいるそうです。ノンクリスチャンの親を失った子どもにとって普遍主義の思想は心を揺さぶられるものがあります。但し、普遍主義はキリスト教の通説として広く受け入れられているわけではないので、注意が必要です。

普遍主義が神学的に正しいのか間違っているのかの問題はさておき、これだけは言えるのではないのでしょうか。最後の審判を下すのは我々ではなく、神であるということです。そして神様の考えは我々の理解を遥かに超えています。同時に神は慈悲深く、正しいお方です。神を信頼し、全てをお委ねしたいと思います。

狩野 暁洋 (英語学科)

一朝の礼拝から 2—

経験はお導き

エレミヤ書 6 章 16 節

今日はエレミヤ書から御言葉を選択させて頂きました。まずこの言葉の意味としては「新しい場所に立っても、昔からの経験を活かして幸せに至る道を進むことで、魂に安らぎを得られる結果となる。」ということだと思いました。まず、ここを選択した理由をお話いたします。先日チャペルアワーの学生スピーチの際に、我が家に産まれた 4 匹の子犬の話をしていただきました。4 匹中 3 匹は知り合いのご家庭に譲渡したのですが、それぞれの行き先を決める際に私は神様の御力を感じる場面がありました。それは、それぞれの行先です。長男と次男は割とすぐに納得のいく行先を得られましたが、三男と四男に関しては本当に神様のお力が働いたと感じる結果でした。

まず三男についてです。子犬が生まれた当初、心から信用出来絶対に幸せになれる家庭に譲渡すると家族で決めていたので、なかなか行先を決まらずに悩んでいました。そんな時、母犬がたまたま診察に行った動物病院にて、獣医師がよければ 1 匹引き取りたいと話をしてくださったのです。獣医師の愛犬となれば健康は約束されまじ、まさかそんな事があるのかと本当に驚きました。

次に四男についてです。四男は生まれた当初心臓が動いておらず、ギリギリに命を吹き返しました。ある意味ふたつの命を授かった子でありましたが、そんな彼は牧師一家に引き取られることになりました。決定した時なんだか深い意味を感じて感動しましたし、なにより今いちばん元気に動き回っているのはこの子で、神様に守られているな、と常に感謝しております。

これらの経験を積んで、神様はそれぞれが幸せになれる適した場所へ導いてくださることを学びました。人生の一つ一つが神様のご計画であり、経験であるそれらを信じることで、つまり神様の御力を信じることで魂に安らぎを得られる結果となるのだと思います。これから先、何か新しいことを始める時、新しい場所にたった時、今までの神様の導きの元での経験を信じて進み続けようと思います。

今田 涼加 (音楽学科 3 年)

一朝の礼拝から 1—

自分の評価とは

箴言 27 章 2 節

皆さんの自己評価は高いでしょうか、低いでしょうか。そしてそれは何によって決まっているのでしょうか？今の時代、SNSの普及とともに、その中でのフォロワー数や「いいね」の数を競い合い、その数がその人の価値であるような錯覚が起こっているのではないのでしょうか。

私自身の自己評価も子供の時から大変低く、人から批判・叱責されると地の底まで沈んでいくような気分になりますし、未だに同じように落ち込むことも多々あります。また褒めてもらっても、なんか「嘘くさい」とか、「どうせお世辞だろう」と素直に受け入れられない自分がいます。SNSの場合も基本的に知り合い同士でつながっていますので、関係性は同じではないのでしょうか。

以前から動画サイトに自分の作品を色々と掲載しているのですが、ある時、ふと、日本人を相手にするのをやめて、英語でタイトルや解説を書いてみたらどうなるだろうと思い立って実行してみました。すると、仲間内からのコメントは激減したのですが、見知らぬ海外の方から時々コメントをいただけるようになりました。(お返事はAIを活用して英訳をしています)。そのときに気づいたのですが、見知らぬ海外の方からのコメントが本当に嬉しく感じるのです。もちろん、それで自己評価が爆上がりするわけではなく、なんとなく自分の今やっていることが間違っていないのかもしれない、という漠然したちょっとした自信につながったように感じました。

もちろん、自分の人生の意味は死ぬときまでわかりませんし、その時になって初めて自分の生きてきた意味がなんであったのか、神の計画が何であったのかわかるのかもしれない。自分に過剰な自信を持たず、しかしながら他人の評価を頼りすぎない生き方を実践するのが導かれた道なのかなと、日々考えています。

『自分の口で自分をほめず、他人にほめてもらえ。自分の唇ではなく、異邦人にほめてもらえ』(箴言 27 章 2 節)

安川 徹 (音楽学科)

一朝の礼拝から 2—

Let us be grateful

イザヤ書 55 章 8~11 節

Psalm 119:105 in the Good News Bible reads: “Your word is a lamp to guide me and a light for my path”. Reading the Bible is a custom for believers. Yet, we tend to forget that the Bible as readily available as it is today, was once basically unobtainable. During his daily interactions with ordinary people, William Tyndale felt that all people should have access to the Bible, regardless of their status. A courageous thought to have in England during the early 1500’s. It was a very different time, where translating the Bible into English was illegal. Parents, for example were sentenced to death for teaching their children the English version of the Lord’s Prayer. The Bible was only available in Latin. Latin was only understood by the very few who could afford an education. In addition, Bible translation was strictly limited to a select minority. Consequently, the general population suffered under these conditions. People also could not read the scriptures for themselves, thus missing crucial biblical truths such as salvation and grace. This reality was something Tyndale could not settle for. Obviously, Tyndale experienced strong opposition when he requested formal permission to start with independent translation work. Thankfully, this did not deter him. Relocating to Germany enabled Tyndale to continue with his mission. At times, Tyndale must have wondered if this mission would ever succeed. Many trials and constant persecution tested his resolve. He was later betrayed, imprisoned, and martyred. Tyndale’s brave perseverance ensured that the English Bible became accessible. It is said that Tyndale’s original translations largely shaped The King James Version. 1 Peter 1:25 (Good News Bible) reminds us: “but the word of the Lord remains forever.” This word is the Good News that was proclaimed to you.

1. Rich, Lori. *The Smuggler’s Flame, Trailblazers Series*. Christianaudio.com. Narrated by Derek Perkins. Audible, 2018, Available at: www.audible.com.
2. Good News Bible

カレン・ストライドム (英語学科)